

# 一休という多面体

その〈像〉と語り

## 一休と その伝燈意識

—おわりに代えて—

飯島 孝良

華叟の子孫、誰が禪を知らず、  
狂雲面前、誰が禪を説く。  
三十年來、肩上重し、  
一人荷擔す、松源の禪。  
頂相自贊、狂雲拜禮。



没倫紹等〔墨斎〕筆・  
一休宗純自贊「一休頂相」  
(東京国立博物館蔵)

本連載において触れて来た一休の〈像〉では、一休は同時代の墮落を批判し、自身が重視する禅道の在り方を示そうとする点が繰り返し注目された。そうした境地は、一休の頂相に付された自贊に表明されている。

例えば、良く知られる東京国立博物館所蔵の頂相には、次のような自贊がある――

華叟の子孫、禪を知らず、  
狂雲面前、誰が禪を説く。

三十年來、肩上重し、  
一人荷擔す、松源の禪。

〔狂雲集〕一三〇

「華叟門下に禪を知る者は誰ひとりおらぬ、この狂雲たる一休を前にして禪を語れる者がおるものか。松源一流の禪という重い責務を、この一休は三十年間一人で担っている。ここに名がみえる松源崇嶽（一一三二―一二〇二）とは南宋の臨濟僧で、

臨濟く三聖く〔……〕く松源く運庵く虚堂く大応く大燈く徹翁く言外く華叟く一休

となつて、一休の法系に連なる存在である。なかでも徹翁義亨（一二九五—一三六九）の語録においては、臨終の際にこう述べたとされる。

昔、臨濟、遷化に臨んで云く、「正法眼藏、這の瞎驢邊に向いて滅却す」と。松源も亦た云く、「【中略】臨濟の正宗、我に至つて平沈せん。苦なる哉苦なる哉」。言い訖つて寂を示す。師（徹翁）も亦た人に付するの語無きこと有り。是に由つて之を觀れば、臨濟の正宗は兩次に滅却せり。諸方皆な此の事を謂いて、師に至つて断絶すとす。嗟乎、為た合に是の如くなるべきか、合に是の如くならざるべきか。（『大徳寺禪語録集成』第一卷、法藏館、一九八九年、二五四頁）

つまり、臨濟の正法は自分のところで滅びるとした松源を受け、徹翁自身もまた子弟に嗣がせるべき教えなどないとしたため、臨濟の教えは、二回滅却したることとなり、弟子たちも「これでは法の断絶ではないか」と考えたというのである。

この一節には、臨濟（？）八六七）が直弟

子の三聖に告げた「吾が正法眼藏、瞎驢の邊に滅却す」（『臨濟録』行録）という句が根柢にある。この句は、臨終に際した臨濟が三聖に己の境地を示すよう求め、これに三聖が一喝を以て応じたところ、「こんな瞎驢のところでは仏法は滅却だ」と口にして遷化した、という逸話に基づく。「瞎」は盲人を指す語、「驢」はロバのことと、「瞎驢」というとどぎつい差別的表現といえる。臨濟は、伝えるべき仏法が直弟子のところまで「滅却」したと痛罵するのである。じつに厳しい態度とみえる。ただし、この語について、『臨濟録』の抄物（禪録について仮名で解釈したもの）に注目すべき注釈がみえる。たとえば、徳川期の抄物のひとつでは、次のようなものもみえる。

抑シテ托上スル也。瞎驢ハ三聖ヲ指シ、又正法眼藏ヲ指ス。【中略】或ハ云ク、伝授ノ語也。林際ノ仏法ハ滅却ノ二字ヲ以テ、宗風、今日ニ盛也。滅却ト云々処デ今日ニ到ルマデ相統スル也。

（萬安英種撰『臨濟録萬安抄』、

一六三二年、五十二丁）

「瞎驢邊滅却」は「抑下の托上」（けなしなが

らも実際は認める意)の語で「伝授の語」だとし、「滅却とは言っても今まで相續している」というその力学を重視している。一休においても、臨済が直弟子に対して「滅却」を告げたことが大きな問いとなり、滅んでこそ興るものは何かが問われたようにも思われてくる。

文明六年「一四七四」(一休八十一歳時)の春、大徳寺に住持するよう勅請を拜し、周囲から祝賀を受ける一休は、喜ぶどころか慙愧に堪えぬとばかりにこう句にしている。

大燈の門弟、残燈を滅し、  
解き難し、吟懐一夜の氷。

五十年來、簑笠の客、  
愧慚す、今日、紫衣の僧なるを。

(『狂雲集』五七四)

「大燈国師の門弟はわずかな法燈を滅した。一夜吟じようとしたが、この思いは氷のように解き難い。自分は五十年にわたって在野の簑笠暮らしだったのに、今日は立派な紫衣に身を包むとは、恥じ入るしかない」と一休はいう。これは、大徳寺の墮落をくさすものであるとともに「滅宗してこそ興宗する」とい

う一休の境涯に通じていく。

一休の姿には、数多くの「矛盾」というべきものがみえる。大徳寺の伝燈を重視しながら「酒に姪し、色に姪し、詩にも亦た姪す」(『狂雲集』五七三)とも口にする一休において、臨済以来の「瞎驢邊滅却」という精神は小さいものではないだろう。すなわち、度重なる戦乱と災厄で荒れ果てる京都と大徳寺の「滅却」に際して、他からの評価よりも自内証(みずからの境地の重視)を旨として、自分と他者のなかにある「矛盾」をごまかすことなく見つめ続け、自分自身を活かしているものとは何かを問い続けていたのではないか。それは安易に嗣ぐものでも嗣がせるものでもなく、一休が真の「自由」——自らに由ること——をたずねて「矛盾」を辞さない〈像〉であり、既存の「形」を批判した先に、自らの重視する禅道を打ち立てんと試み続ける〈像〉だったのでないだろうか。

飯島 孝良(いじまたかよし)

花園大学国際禅学研究所専任講師。専攻は禅文化史・日本宗教思想史。主な著作に、『語られ続ける一休像—戦後思想史からみる禅文化の諸相』(ペリかん社)ほか。